

久邇京くにおみやこに在りて、寧楽なげらの宅いへに留とどまれる  
坂上さかのうへ大嬢のおほをとめを思ひて、大伴宿禰家おほとものおくねやかもち持もちの作る  
歌一首

七六五番

一重山ひとへやま 隔へなれるものを 月夜良つくよよみ 門かどに出いで立たち  
妹いもか待まつらむ

藤原郎女ふぢはらのいらつめ、これを聞ききて即すなはち和こたふる歌一首

七六六番

道遠みちとほみ 来こじとは知しれる ものからに 然しかそ待まつ  
君きみが目めを欲ほり  
らむ